



カトリックの典礼とグレゴリオ聖歌

浜口 吉隆

最近、カトリック教会ではグレゴリオ聖歌を耳にすることはなくなり、CDに収められたものを音楽愛好家が聴くだけになってしまったと憂える声が教会の内外から聞こえてくる。その原因は第二ヴァチカン公会議（1962-1965年）によって典礼の国語化が推進され、教会がグレゴリオ聖歌を軽視または放棄してしまったからではないとも言われる。確かに少なくとも日本の教会や修道院ではグレゴリオ聖歌は衰退している現状を認めざるをえないが、誤解を避けるために、第二ヴァチカン公会議の『典礼憲章』を引用しておこう。「教会は、グレゴリオ聖歌をローマ典礼に固有な歌として認める。したがってこれは、典礼行為において、他の同等のものの中で首位を占めるべきである」（116条）。「グレゴリオ聖歌の諸書の規範版が完成されなければならない。さらに、聖ピオ十世による改革後に、すでに出版された諸書の批判版が新たに出版されなければならない。小さな教会で使用するために、簡単な曲を集めて出版することは有益である」（117条）。このように、教会は決してグレゴリオ聖歌を廃棄するどころか、「典礼に固有な歌」として承認また推奨している。ただ各国また民族の文化や伝統をも重視するところから、その宗教心を表現する国語の典礼と民族の伝統的音楽をも重視する政策を展開してきたのである。

ところで、すでに二十年前に皆川達夫氏は『中世・ルネッサンスの音楽』（講談社現代新書 1977年）で、若者にまで熱狂的なファンをもちうるグレゴリオ聖歌の源泉を探り、西洋音楽に広範な影響を及ぼした宗教音楽を紹介している。神を信じ、神を賛美し、神に感謝する「祈りの歌」、つまり典礼音楽であるグレゴリオ聖歌は心の歌として普遍的に現代人の琴線にも触れる不思議な力を秘めているという。この音楽にはイエス・キリストへの信仰による「神のことばの招き」と「人間のことばによる応答」とが響き合い、時間を超えて永遠のいのちの神秘が奏でられているからであろうか。私たちは“Liber Usualis”のグレゴリオ聖歌による典礼から国語の「典礼聖歌」に移行する時代を経験した者であるが、今でも暗唱している曲の一部を静かに口ずさんでいることもある。

ここで、グレゴリオ聖歌に愛惜の念をもつ人に二冊の書物を薦めたい。一つはミサ曲を中心にカトリック典礼音楽を紹介する相良憲昭氏の『音楽史の中のミサ曲』（音楽之友社 1993年）である。カトリック典礼の簡略な説明と豊富な曲目を提供している。もう一つはグレゴリオ聖歌をこよなく愛し、1941年にテ・ラローシュの『グレゴリオ聖歌の歌い方』を訳出している岳野慶作氏の『グレゴリオ聖歌のこころ - その霊性の探求』（創風社出版 1996年）である。これは著者が死ぬ間際まで開講していたグレゴリオ聖歌研究会の記録である。ミサ曲だけでなく、カトリック典礼のもう一つの枢軸である聖務日課の曲をも含めて「グレゴリオ聖歌の神秘」の深さを平易に解説している。「神にあふれた靈魂の言語」である典礼音楽は、魂の呼吸である霊性が溢れているものであるから、私たちの心を永遠性に向けて高めてくれる芸術であるという。教会はその普遍性と地域の特異性を統合する信仰と典礼音楽の創造の課題を担っているであろう。

(Yoshitaka HAMAGUCHI : 文学部教授)

キリシタン世界観とその日本における意義

青山 玄

1988年7月以来、私は国際日本文化研究センターの共同研究「日本人の他界観」に研究員の一人として参加し、5年間に3回研究発表をしたが、その最後の発表「キリスト教他界観とその日本における意義」が、94年3月同センター発行の『共同研究、日本人の他界観』の中に収録されると、翌年3月に発行された『純心人文研究』創刊号所収の宮崎謙太郎氏の論文「キリシタン他界観の変容 - キリシタン時代より現代のカクレキリシタンまで - 」にも参照されたが、宮崎氏は「キリシタン時代の他界観の基本は、天にあるパラソ（天国）と地中にあるインフェルノ（地獄）の垂直他界観である」と書いて、ごく普通の意味での領域的な他界観についてだけ扱っている。それはそれで誠に結構な研究である。しかし、私が京都でなした様々な分野の専門研究者たちとの共同研究の中では、禅宗の立場に立つ研究者から「何をもちて他界とするのか」の議論も飛び出し、死後の世界だけではなく、今現にこの世で共存している他界というものについても扱うべきだとの見解が大勢を占めていた。それで私もこの観点から、キリスト教が関わっている他界を、この世との時間空間的連続性で考えられ表現される他界と、この世の中に内在していてもこの世を超越して、そういう連続性では表現され得ない他界との二つに区分して、上述の論文を書いたのであった。ここでは「来世」という意味合いの濃い前者をAタイプの他界、「霊界」という意味合いの濃い後者をBタイプの他界と呼ぶことにしたい。

16, 7世紀の日本に伝えられたキリスト教他界観

元来イスラエル人たちはオリエントの他の多くの民族と同様、死後の生命は実在の影のようなもの、何の価値も喜びもないものと考えていたようで、ヘブライ語でシェオール、ギリシャ語でハデスと呼ばれている陰府は、善人も悪人も、すべての死者が行く所と考えていた。漸く旧約の末期に、復活信仰も登場しているが、このような思想的流れの中で福音を説いたイエスは、悪人の行く地獄とは違う所として、善人の行く陰府について語っており、「金持ちとラザロ」の譬え話の中では、「アブラハムの懐」という言葉も使って教えている。また「私が神の指で悪魔を追い出しているのであれば、神の国はあなた方の所に既に来ているのである」などの言葉で、Bタイプの他界の現存についても教えている。聖書のこれらの教えに従って、Aタイプの天国に対する信仰と共に、復活したキリストや神の聖霊の、また悪魔たちのこの世におけるBタイプの他界の現存についての信仰も定着するに至ったが、2世紀に、キリストの再臨は遠い将来のことかも知れないと考えられるようになると、死者の靈魂はそれまでの間、どこでどういう状態にあるのかが、あらためて問題にされ始め、3世紀にアレキサンドリアのクレメンスは、死後の魂の浄化は魂と同じ本質を持つ精神的な火によって行われるが、この火は魂が従順である場合には光に、不従順である場合には火になる、などと説明した。死後のこのような「清めの火」の思想は、その後人々の関心を集めて発展し、遂にダンテの『神曲』などにも反映しているように、天国・煉獄・地獄の三つに大別できる全宇宙的広がりをもつ来世観に発展した。

16世紀の我が国に伝えられたキリスト教他界観は、このようなAタイプのものばかりでなく、この世に現存して働く神や諸天使・諸聖人の霊と、それに反抗して人々の靈魂を地獄に導こうとしてやまない悪魔たちなど、Bタイプの他界についての話も、当時のキリシタン書や宣教師の書簡に頻りに登場しており、悪魔の誘惑や攻撃に負けないため、聖母や諸天使・諸聖人に祈ることも、強く勧められている。

日本人によるキリスト教他界観の受容

当時の日本人たちは実証性に富む宣教師たちの知識と文明に感服し、それまでは謎であった日食・月食などの天体現象についてばかりでなく、宣教師たちが確信を持って教え

ていたAタイプの他界観についても、信憑性の高い話として好んで耳を傾けていた。地獄を地球内部の火の牢獄のような所として説く宣教師たちの教えは、時々火山の噴火による被害を体験していた日本人には納得し易かったであろう。地球儀は16世紀に数多く制作されて信長にも献上されていたが、ハビアンとの1606年の論争について述べている林羅山の『排耶蘇』に出て来る「円模の地図」も、その時の論争内容から察すると、地球儀の表面に描かれた地図を指していたと思われる。「地中を以て下となす。地上亦天たり。吾邦舟を以て大洋に運漕す。東極これ西、西極これ東。これを以て地の円なるを知る」をいうハビアンの言葉から察すると当時のキリシタンたちは、天国はこの地球を上下左右のあらゆる角度から包み込んでいる天にあり、地獄はこの地表世界によって封じ込められた地中の火の牢獄のような所というイメージを持っていたのかも知れない。

キリシタンたちは、来世を身近に感じさせるこのようなAタイプの他界観と共に、Bタイプの他界観も堅持して、地獄の霊である「天狗」(悪魔)が多くの人を騙し地獄に導き入れようとして、各人の心に休みなく働きかけて来ることを信じており、このような天狗の策動に負けなため、しばしば神に祈り、またキリスト・聖母マリアをはじめ、諸天使・諸聖人、特に自分の守護の天使に助けを願い求めていた。

キリシタン他界観とその日本における意義

キリシタン他界観が、仏教と共に導入されたインドの輪廻転生思想を完全に排除して、この世においても煉獄においても、各人は神との一致と永遠の幸福を目指して自己変革をなし遂げるよう召されており、この世での各人の生き方如何で永遠の運命が決まる、としている点は注目に価する。激動の戦国時代に生きてこの世の人生のはかなさを痛感していた多くのキリシタンは、他界の神を主君とし、その神への奉仕とパライソでの永遠の幸福を目指す生き方に命をかける程に、心を大きく変革しており、彼らは、自分の中に他界からの導きや助けが不思議に働くのを度々体験し、他界の存在を実証的に確信していたのではないと思われるからである。彼らが、後年、どんな迫害や脅しにも屈せず、あの世での幸せに対する信仰と希望を堅持し得たのも、その心がこのような体験によって内面から支えられていたからであろう。もしこの推測が当たっているならば、キリシタン他界観は、日本人宗教心の原点と考えられる我が国古来の先祖崇敬や神頼みの習俗とも矛盾せず、それらを高揚し、新しい形に発展させる可能性を秘めていたと思われる。

幕末・明治期に渡来したキリスト教宣教師たちは、高度に発達した欧米の文物制度を摂取しようとする日本人の国家的必要に応えようとしたためか、特にプロテスタント宣教師たちは、一般に聖書に基づいて個人の人生を改善琢磨することや、日本社会を近代化することを強調し勝ちで、天国の幸福や地獄の苦しみなどについては、殆ど教えようとしなかったようである。そのためか、野村耕三著『日本人の終末観 - 日本キリスト教人物史研究 - 』(新教出版社、1981年)やその他の個別的研究から伺われる限り、特に日本人プロテスタントの間では、来世についての見解が人によって大きく違っており、全般的にぼけていて、キリシタン時代のように苦しみに耐え抜く活力や生き甲斐を与えるものとはなっていない。あの世の存在をはっきりと否定する者はいないが、自分で考えても分からない他界には、ほとんど関心がないように思われる。諸宗教が先祖供養を金儲けに利用していることに厳しい批判姿勢を堅持して来たプロテスタント諸派が、この優れた美点にも拘らず、日本社会に土着化できずにいるという印象を与えているのは、一つにはキリシタンたちのように、現実体験に裏打ちされて生き生きと確信されているキリスト教他界観により、我が国古来の宗教心を高揚し完成することができずにいるからではなからうか。現代のキリスト者も、キリシタンの生き方に、もっと学ぶべきであろう。

(Gen AOYAMA : 文学部教授)

1996年度日本カトリック大学連盟図書館協議会実務研究会報告

喜多島 晶子

10月24日・25日の二日間にわたって、実務研究会が当番校である本校で開かれました。北は北海道から南は鹿児島まで、12大学15名の参加があり盛況のうちに実りある研究会が行われました。

<第1日目>

名古屋市内が一望できるL棟9階会議室で、美濃部重克図書館長の挨拶の後、長崎純心大学の山下真美氏と南山大学の栗山義久氏の報告、質疑応答が行われました。

「早坂記念図書館キリシタン文庫について」と題する山下氏の報告は、地域性を活かした長崎ならではの“キリシタン文庫”・“カトリック文庫”について、とても参考になるお話が伺えました。迫害と潜伏の時代のキリシタンがどのようにして信仰を守ったかというテーマのもとに、郷土史及びキリシタン関係の資料を“通行手形”などの一枚物にいたるまで、散逸させることなく収集・保存されているキリシタン文庫。資料の写真を見せていただき、キリシタン研究者として名高い片岡弥吉氏を生んだその歴史的な使命だけでなく、キリシタン関係資料そのものが、とても貴重なものだということがよく解りました。また、資料のマイクロ化が予算の問題で頓挫したり、保存庫の空調や薫蒸など、資料保存についてはいずれも同じ問題を抱えているようでした。

栗山氏は「和訳聖書について：異文化との出会いの視点から」と題して、近代和訳聖書の持つ意味について、ギュツラフ、ヘボンを例に、異文化との出会い（衝突・融合）という視点から、またその接点としての「翻訳」そのものの問題を取り上げ報告されました。ギュツラフが日本語教師とした音吉、久吉、岩吉の三人が、宗教思想用語の貧困な漁師であり語彙・表現力とも貧弱な少年であったことが、異質な通俗的口語訳の和訳聖書を生み出したということ。日本語としての不完全さから、翻訳文の評価が低いのが、当時の漁民の世界観を通して読み直せば、もっと違った評価の可能性もあるとのことでした。ヘボンにおいては、彼の編纂した『和英語林集成』の初版と三版を比較すると明らかなように、急激な近代化の中で、数多くの造語が行われ、その過程で、漢訳聖書を参考に新しい日本語の文体を模索し続けた結果が、その後の基準ともなる明治元訳を生み出すこととなります。和訳聖書の多様性は、キリスト教を伝えようとした宣教師とそれを根付かせようとした（あるいは反駁した）日本人達との文化的衝突の所産とも言えます。そして翻訳とは、日本文化（一固有の文化）の中にキリスト教の持つ普遍性を見出す作業であり、その意味では、聖書翻訳は、過去の問題ではなく、バベルの塔の逆説としても人間に課せられた終わりのない継続事業と言えるかも知れないとのことでした。図書館において「和訳聖書展」を開催中ということもあり、とても興味深く聞くことができました。

報告終了後、図書館で開催中の「和訳聖書展」および図書館内を見学しました。夜の懇親会では、東山ガーデンの蒸籠蒸し料理と少しのアルコール、名古屋の夜景とを楽しみながら、各地の大学の方々と情報交換・御国自慢で盛り上がりました。ここでも、図書館の抱える問題はいずれも同じだと実感した次第です。その後、マイクロバス 電車 タクシーを乗り継いで神言修道会多治見修道院の研修センター・ログハウスへ移動しました。

<第2日目>

ボランティアの方の案内による修道院聖堂の見学の後、南山大学の笹山達成氏による「南山大学図書館カトリック文庫について～過去・現在・未来～」と題する報告が行われました。

南山大学では、カトリック大学としての使命から、散逸しつつある明治・大正・昭和初期のキリスト教関係資料の収集を行い、わが国近代におけるキリスト教文化の歴史を精緻に究めるに足る資料群（カトリック文庫）の構築を1989年から開始しています。これらの資料は、カトリック資料費という予算により購入するほか、国内のカトリック教会、修道会などの機関をはじめ個人の方々からも協力を仰ぎ、現在までに約6,400冊の資料の寄贈を受けています。この文庫を運営していくにあたり、図書館では館員からなるカトリック文庫プロジェクトを組織し、資料の収集（寄贈の依頼、受取り）、選書、日本におけるキリスト教関係資料の出版状況調査、カトリコス（本誌）の発行、カトリック文庫の資料を使った企画展示会などを行っています。また、これらの活動に対する助言を得るため教員と事務職員からなるカトリック文庫協議会も併せて設置しています。カトリック文庫の資料整理は、未だ順調には進んでいない現状から、利用についてもかなりの制限をしていますが、なるべく早めに通常の利用ができるようにしていきたいと思っています。こういった文庫を維持していくことは、限られた人員では難しい面がありますが、キリスト教関係の研修も受けられる体制を作り、この分野にも知識を持った図書館員を育てていくことが必要です。さらには、この日本カトリック大学連盟図書館協議会で図書館相互協力事業の一環としてカトリック関係資料の総合データベースを構築し、それぞれの大学図書館が各地域でのキリスト教研究の拠点となっていくことが望ましいのではないだろうかとの提案がなされました。

その後、各大学図書館が抱えている課題・問題について意見・情報交換を行いました。大学図書館の置かれている厳しい状況の中で、自己啓発や研修の在り方等について、カトリック大学の図書館員としての資質を高めていく必要は感じているが、時間がとれないという問題が多くあがりました。また、この実務研究会でも、カトリック大学の特色を出した内容のテーマで今後も勉強していけたらいいという意見がありました。各図書館に共通して切実な資料保存のスペースの問題に対しては、資料の相互利用を積極的に行うことによって同じものを所蔵しないなどの解決策が提示されました。これについては、雑誌を消耗品費での購入に切り替え、スペースの問題をクリアされたというある参加館の英断に、逐次刊行物係の私は拍手をおくってしまいました。

修道院聖堂での記念写真撮影、オプショナルツアーの虎溪山・永保寺（こけいざん えいほうじ 夢窓国師が草創）見学と、無事にスケジュールをこなし二日間の実務研究会を終えることができました。

当番校として、数々の不手際で参加者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお許しいただくとともに、ご参加・ご協力いただいた皆様に感謝申し上げたいと思います。

(Akiko KITAJIMA : 図書館事務課)

聖書和訳の歴史

大塚利恵子

今回は聖書和訳の中心的人物ヘボンと、同じく聖書和訳の功労者ブラウンも交えて紹介します。

Brown, Samuel Robbins (1810-1880)

アメリカのオランダ改革派教会派遣の宣教師。コネティカット州イースト・ウィンザーに生まれる。アメリカ開拓のピルグリム・ファーザースの子孫であり、敬虔篤信な母フィーベは讃美歌319番の作者。1932年イエール大学卒業。ユニオン神学校に学び、ニューヨーク市の長老教会に属した。選ばれて中国モリソン記念学校長となる。1839年マカオ、のち香港に移り、8年間中国青年のキリスト教化に尽くした。

Hepburn, James Curtis (1815-1911)

アメリカ長老派教会派遣の宣教師。米国ペンシルヴェニア州ミルトンに生まれる。プリンストン大学に学び、次いでペンシルヴェニア大学医学部に入り、医学博士号を取得。1834年ミルトンのアメリカ長老派教会に入会。

1841年宣教師として海外伝道を志していたヘボンは、良き理解者である妻とともに東洋伝道に向かい、シンガポールにてギュツラフの「約翰福音之伝」を得る。たまたまマカオのモリソン記念学校から来ていたブラウン夫妻に会い、これがその後、40年にわたる交友のはじめとなり、二人は日本で20年間も一緒に伝道することとなる。

1843年ヘボンはシンガポールで中国語を学んだ後、南中国のマカオに至り、S.W.ウィリアムズの家で中国伝道の事情を学んだ。その後アモイに移り医療伝道を開始したが、夫人の健康がすぐれず1845年帰国。

1859年ヘボンは日本開国の動きとともに日本宣教の決意を固め、10月夫人とともに神奈川に上陸。成仏寺に住む。11月ブラウンも上陸、英語教授の傍ら伝道に努め、ヘボンと呼応して聖書翻訳に従った。

ヘボンは施療事業や辞書の編集その他日本人の教育で忙しくしていた間にも新約聖書の福音書の訳をすすめていた。ヘボンは聖書翻訳の方針を、教派的でないこと、共同一致でやること、文章も平俗に流れず漢字まじりの文章体にすべきことを主張していた。

1867年5月「和英語林集成」出版。ヘボンの「日本における約八年間の成果の一部分」^{注1)}であり「日本のためになし得た最上の宣教事業の一つ」^{注2)}であった。

1867年4月ブラウン宅失火のため貴重な和訳資料や翻訳原稿が焼失。しかし、四福音書のうち馬太伝、馬可伝の原稿だけは日本人の友人に貸してあったので災禍をまぬがれた。5月ブラウン帰米。その後もヘボンはダッチ・ミッションのジェームズ・バラ、長老派のタムソンとともに聖書の翻訳を継続し、また聖書翻訳の原稿筆写のため、日本人奥野昌綱を雇う。

1869年ブラウン新潟に再来。翌年、聖書翻訳を急務と察し、横浜に出てきて再びヘボンと協力、訳業に励んだ。

1872年(明治5)ヘボン、ブラウンの協力で、奥野が版下を書き、「馬可伝福音書」「約翰伝福音書」1873年(明治6)「馬太伝福音書」が出版された。ブラウンいわく「あらゆる階層の日本人の読者にすぐわかるような文体で、しかも格調高い神の靈に満ちた言葉で真理を伝えようような日本語聖書の翻訳」^{注3)}の完成となった。

1872年9月日本在留の諸ミッション合同の第1回宣教師会議が横浜のヘボン宅で開かれた。集まったのは米国長老教会、米国改革教会、米国組合教会の3ミッション代表であった。そこで公会主義の確認、新約聖書の共同翻訳、讃美歌編集の事業が計画された。とりあえずヘボン、ブラウン、D.C.グリーン3氏が委員に推挙されたが、同会議は原則として各ミッションボードから選出された1名の委員をもって構成することを議決しているため、その後も不参加のボードに働きかけた。

1874年(明治7)ようやく前述の3委員に加えて4氏、計7名がそろい翻訳委員社中が発足。しかし結局のところもとの3人が責任を負って訳業を進めることとなった。それに日本人協力者として奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎がヘボン、グリーン、ブラウンを援けた。

彼らは、ジェームズ欽定本を参考に、ギリシャ原本を底本としたが日本人輔佐者らは原語を解せず、翻訳者達は日本語に熟達していないありさまだったのでその訳業の困難さは並大抵のことではなかった。漢語を交えつつ、平易さを失わず、独特の格調を持った委員訳聖書の文体はこうした委員と日本人輔佐者らの苦心の結晶であった。

翻訳委員社中は訳了次第出版してきたが1879年ついに完了。1880年(明治13)4月完成祝賀感謝会を催した。病のため帰米していたブラウンは、この通知を受け喜びつつ永眠した。

新約聖書完訳後、過労に陥りリューマチに悩んだヘボンは、1881年チューリヒに半年あまり静養しただけで再び旧約聖書の翻訳に専念した。

旧約聖書の翻訳に関しては、新約の翻訳委員社中の仕事が終わりに近づき、以後は旧約の翻訳に着手することとして発展的改組を行い、聖書常置委員会を発足した。委員長ヘボンと各ミッションの代表で始められたものの二度程改組され最終的にヘボン、ファイソン、フルベッキがもっぱら翻訳に励むこととなった。また、旧約も新約と同様日本人松山高吉、高橋五郎が輔佐者として協力し分冊刊行してきたが、1887年(明治20)ようやく完成した。

「新約の翻訳委員が挙げられて以来、ここに至るまでの十五年間、終始変わらず訳業に尽くしたのはヘボンただひとりであった。彼自身が訳業に着手したときから数えれば、じつに二十数年、先駆者ギュツラフからでは、じつに半世紀を要した大事業であった。」^{注4)}

1889~91年明治学院初代総理を勤め、92年指路教会の献堂に尽力。同年帰国。ニュージャージー州イーストオレンジにて引退し、1911年同地に没す。

以上3回に渡って聖書の翻訳に貢献した人々を紹介してきました。これはモリソンの遺志を引き継ぎ、ギュツラフ、ウィリアムズ、ブラウン、ヘボンが大きく影響を受けながら聖書和訳を成し遂げていった道筋です。

キリスト教の日本伝道に向けて多くの海外の宣教師が聖書を基本と考え、まずは翻訳に心血を注いだ事実がわかります。さらに日本に馴染みの深い中国語訳を発端に、辞書などなかった時代に無学な漂流民の日本人をたよりに和訳を試みたり、また自ら辞書を編纂し協力しあってより日本人にわかりやすい聖書の和訳にとりくんでいった姿には驚かされません。ましてや切支丹禁制下の背景を考えると彼らの情熱はいかばかりか。

幕末から明治初めにかけて日本が大きく動いた時期に、時を同じくして聖書も海外伝道者の熱い思いを持って上陸し、広められていったのです。

(Rieko OTSUKA : 図書館事務課)

注1) 「ヘボン」p.124

2) "

3) 「日本の聖書」p.173

4) " p.281

参考文献

海老澤有道著「日本の聖書」(講談社学術文庫)

高谷道男著「ヘボン」(吉川弘文館)

「日本聖書協会100年史」(日本聖書協会)

門脇青、大柴巨著「門脇文庫日本精理聖書漢訳史」(新教出版社)

海老澤有道著「CLASSICA JAPONICA 第10次 ヴァリア篇 解説」(天理図書館)

「日本キリスト教歴史大事典」(教文館)

「和訳聖書展～南山大学図書館カトリック文庫所蔵資料より～」

喜多島 晶子

「和訳聖書展」を本学図書館において10月28日～11月8日の日程で開催しました。本館所蔵の明治期の和訳聖書のうちへボン「新約聖書約翰傳」(1872年 [米國聖書會社] 出版)など約45点のほか、聖書の解説・翻訳者・南山大学カトリック文庫紹介パネル等を展示しました。また、神言修道会多治見修道院所蔵のミサ聖祭で使用する聖杯(カリス)・祭服・聖体顕示台等の資料も展示し好評を博しました。期間中には大学祭もあり、学外の方の見学も多く、来場者は395名を記録しました。会場で行ったアンケートには、「初期の聖書翻訳の苦勞がしのべれた」「カトリック大学らしい特徴を活かした企画展を続けて欲しい」等のご意見がありました。

(Akiko KITAJIMA : 図書館事務課)

和訳聖書発祥の地 ～愛知県知多郡美浜町小野浦～

長谷川 久美

知多半島にあるこの町は、最初の和訳聖書の著者ギュツラフに日本語を教えた尾張漂民“岩吉・久吉・音吉”の郷里であることから、和訳聖書発祥の地とされています。夏になれば海水浴場となって賑わう内海^{うつみ}。その北にある小野浦の海岸沿いから道を1本隔てた場所に、3人の遺業を称える頌徳記念碑が静かに建っています。この地の漁民であった彼等が遭難し、最初の和訳聖書作成を協力するにいたった顛末、そしてその後の消息が碑や看板に記され、民間初の国際交流人となった彼らの苦難に満ちた生涯を偲ぶことが出来ます。

(Kumi HASEGAWA : 図書館事務課)

資料寄贈者(1996.11.20現在)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方より貴重な資料を寄贈して頂きました。ここに御名前を掲載させて頂き、改めて謝意を表したいと存じます。

【個人】

ダンフィー, ウォルター氏(南山大学助教授)

編集後記

今回のカリコスはかなりのボリュームです。読み応えがあるものになりました。(M.M.)
先年は研究集会開催、企画展の実施と充実した年になりました事を嬉しく思います。(Y.O.)

南山大学図書館カトリック文庫通信
カトリコス 第7号 1997.1.1 発行
南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト
編集委員:三浦 基、尾形裕司
〒466 名古屋市昭和区山里町18
Tel:052(832)3163 Fax(G3):052(833)6986